

## ラジオ沖縄「方言ニュース」から見る沖縄方言

柴田 真希

### 1. はじめに

「方言ニュース」はラジオ沖縄で毎週平日の13時から15分間放送されている番組で、ラジオ沖縄が開局(1960年7月1日)した当時から放送されている長寿番組である。現在は沖縄大学福祉文化学科非常勤講師の伊狩典子さんと沖縄方言普及協議会の副会長である小那覇全人さんをキャスターとして放送している。2004年10月からはインターネットの「おきなわBBtv」で配信され、ここでは字幕スーパーで標準語翻訳も行われている。

ここから、なぜ現代でも「方言ニュース」が存在し得るのか疑問に思った。「方言ニュース」が存在し得る理由として沖縄の人々は本土の人々とは異なる、方言に対する気持ちなどがあるのだろうか。本稿では、「方言ニュース」の制作に関わる方々へのインタビューをもとに、その疑問を明らかにしていく。

### 2. 「方言ニュース」が存在する意義と理由

#### 2.1 歴代のキャスターについて

始めに、「方言ニュース」歴代キャスターの略歴をあげる(大城(1978)、日外アソシエーツ編(1994)、塩田(1999)および筆者のインタビュー調査による)。

##### 一代目キャスター

金武良章(1908~1993年)

使用方言: 首里方言(出身地: 首里)

肩書き: 伝統組踊保存会会長、沖縄芸能連盟会長

##### 二代目キャスター

仲井真元楷(1908~1984年)

使用方言: 那覇方言(出身地: 那覇)

肩書き: 琉球芸能家、沖縄芸能連盟会長

##### 三代目キャスター

大里徹: 当時のラジオ沖縄の社長であった新垣淑哲氏(1930~2005年)のラジオネーム(小那覇全人氏のインタビューより)

使用方言: 那覇方言

伊狩典子(1931年~)

使用方言: 首里方言(出身地: 首里/両親の出身地: 首里)

肩書き: 沖縄大学福祉文化学科非常勤講師など

小那覇全人(1925年~)

使用方言：首里・那覇方言（出身地：嘉手納／両親の出身地：首里）

肩書き：沖縄方言普及協議会副会長

現在は伊狩さんと小那覇さんの二人体制で放送されている。

## 2.2 「方言ニュース」の沿革

「方言ニュース」について紹介している塩田（1999）と小那覇（2004）の記述を以下に挙げる。

「方言ニュース」は、一時的な中断（1968.10～1973.6）をはさみつつ、現在でも月曜日から土曜日の定時コーナー（5分程度）として放送されている。これまでのキャスターは、金武良章氏（首里方言、1960.9～1968.9）、仲井真元楷氏（那覇方言、1973.7～1981）、大里徹氏（那覇方言、1981～1982）、小那覇全人氏（那覇方言、1982～）、伊狩典子氏（首里方言、1982～）となっており、現在では月水金土を小那覇氏が、火木を伊狩氏が担当している。（塩田（1999））

方言ニュースは1960年9月から延々と5年の中断はありましたが現在まで続いております。因みに歴代のキャスターを紹介します。開局当初1960年から1968年まで先に述べました金武良章さん、5年の中断があり、1973年から芸能研究家として名を馳せた仲井真元楷さん、1982年以降現在まで伊狩典子さんと私の二人で担当しております。伊狩さんは老人福祉センターの所長をつとめるなど社会事業にも関心を寄せる女性で、首里出身で、首里方言を格調高く使いこなしています。1988年、山形県で開かれた全国大会に沖縄代表として出場し、見事優勝するという実績を残しております。首里方言の伊狩さんに対して、私は那覇方言と首里方言の折衷型をとっています。

（小那覇（2004）：2002年開催の「地域語発展のために」シンポジウムで話されたもの）

仲井真さん以降のキャスターについて、塩田（1999）はまず大里さんに交代し、その後二人体制に変わったとしているが、小那覇（2004）では直接現在の二人体制に変わったとしている。この点については、1983年7月8日付の『琉球新報』に、「方言ニュース」について、以下のような記述がある（ラジオ沖縄（1995）より）。

途中4年9か月の休止をはさんで18年間、放送回数も約5600回を数えている超長寿番組。現在は2代目パーソナリティーの仲井真元楷氏が病氣療養のため、伊狩典子さん、小那覇全人さん、大里徹さん（ペンネーム）の3人のパーソナリティーが交代で月曜日から土曜日まで午後2時から5分間放送している。

また、仲井真（1983）にも「“方言ニュース”は昭和35年9月12日からラジオ沖

縄で始まり、担当者も私で二代目、現在は病氣療養のため休んでいるので、三人の三代目担当者が交代で放送している」とある。さらに、今回インタビューの際に伊狩さんから三代目のキャスターについて伺ったときに、三代目のキャスターで大里さんだと思われる方の話を聞いた。以上のことから、仲井真さんの後のキャスターは、当初、三人体制で行われていたのだと思われる。

次に休止期間についても疑問がある。1966年に刊行された『沖縄の言論 新聞と放送』には、「最近この「方言ニュース」は廃止するにいたった」と書かれており、その理由として方言を正確に表現できるタレントが次第に少なくなり、かつその養成は次第に高価につくようになったため、としている。この記述からは1966年には「方言ニュース」が放送されていなかったことになるのだが、これは1968年に休止されたとする塩田（1999）、小那覇（2004）の記述と大きく異なる。

実際には、いつからいつまで休止していたのだろうか。それを確認するために、『沖縄タイムス』のラジオ欄に注目してみた。1960年代から1970年代初頭にかけてのラジオ欄に「方言ニュース」という番組名が掲載されているかどうかをたどってみると、1964年9月14日から1974年4月4日の間、記載がないことが分かった。このことから、1966年の時点では、「方言ニュース」という番組名が表に出なくなっていたことが見て取れる。再開の時期については、塩田（1999）と小那覇（2004）が1973年としているほか、仲井真（1983）にも「私が引き受けてからも満9年が過ぎ、もう10年目に入った」とあることから、1973年には方言ニュースが再開されていたと考えられる。

以上のことから、1964年9月14日から1974年4月4日までは、ラジオ欄には番組名が掲載されていないが、完全な休止期間は1968年10月から1973年6月までで、それ以外の期間は、「方言ニュース」は存在していたのではないかと考えられる。おそらく、別の番組の1コーナーとなり、番組名がラジオ欄に掲載されなかったのではないか。その後、1974年4月5日からは独立した番組として、ラジオ欄にも記載されるようになったと考えられる。

つまり「方言ニュース」は、1960年9月の放送開始から4年後の1964年9月にラジオ欄から番組名が消え、1968年に休止されたのにもかかわらず、1973年に復活し、1974年にはラジオ欄にも記載されるようになって今日に至るのである。この経緯は、「方言ニュース」の存在意義の変遷を反映しているのではないかとと思われる。次にその点について考えていく。

### 2.3 「方言ニュース」が存在する意義の移り変わり

「方言ニュース」が始まった1960年の12月に、『沖縄タイムス』に琉大招へい教授の嘉納孔氏が沖縄の方言事情について述べた文章が掲載された。その中で、「方言ニュース」が批判的に取り上げられていたのに対し、翌年の1月にラジオ沖縄側が反論を寄せるという論争が起こった。資料 〇〇 に、それぞれの全文を掲載した。ここでは、

まず、嘉納氏が「方言ニュース」に言及している箇所を挙げる。

老人に喜ばれるとか、社会問題に興味をもたせるためにとかいう理由で、本土では皆無とおもわれる方言ニュースを放送しているところがある。普通語を理解できない老人は、おそらく小学校もロクに出ていないであろう。その人々に、方言のニュースを聞かせても、おそらくその内容の理解は困難であろう。方言ニュース放送という目アタラシイ企画で、地方の聴取者を少しでもひきつけようとするマス・コミのコマシャリズム（商売ゲ）のあらわれとしかおもえないのである、時代の先端をいくマス・コミにしては、方言のニュース放送はまことに珍風景である。私は、沖縄の古典演劇や民謡をのぞいては、沖縄の文化の発達のために、方言を追放すべきであると思うのである。

（『沖縄タイムス』1960年12月28日）

これを受けて、当時のラジオ沖縄編成部長の設楽敏雄氏が寄せた反論は、以下のようなものであった。

われわれは方言ニュースを特に方言を保護しようとして放送するといったようなだいそれた考えは毛頭ない。（中略）われわれはこれら特に新聞の、ラジオのニュースに接する条件を言語的にもたない人々にサービスしているだけで、言語政策とは何の関係もない。（中略）そしてわれわれは方言ニュースを永遠に続ける意思はない。きく人は次第に少なくなり、それはいつかは失われるべき番組である。しかもその時限はせいぜい五年を出ないと考える。

（『沖縄タイムス』1961年1月10日）

このように、「方言ニュース」は放送開始当初、方言しか分からない人々を対象としていたという。しかし一方で、その当時（1960年代）の時代背景を考えると、本土復帰に向けての機運が高まるなかで、日本本土と同化しようという動きが沖縄にはあったと考えられる。その風潮の中で、方言が重視されるとは考えにくい。先にも述べたように、今回のインタビューで小那覇さんから、休止の本当の理由はスポンサーが付かなかったことだ、と伺った。このような状況の中で「方言ニュース」は番組開始から8年後に一回、終了する。

こうしていったんは存在意義を失ったはずの「方言ニュース」であるが、その後、1973年に再開された。再開の年が1973年なのは、前年の1972年に沖縄が本土復帰を遂げたことと関わりがあると考えられる。本土復帰によって、かえって沖縄の独自性が見直され始めたのではないだろうか。沖縄のアイデンティティの象徴として、方言があらためて重要視されるようになったのだと思われる。

今回の調査で、ラジオ沖縄の制作報道部長である森田明さんに、「方言ニュース」を

放送する意図についてあらためて伺ったところ、今では方言が分からない人に向けても放送しているとのことだった。方言ニュースを通じて方言に触れる機会を提供していたり、インターネットで配信していたりすることで海外や移民の方々に向けても放送されている。これらは、ラジオ沖縄の方針である「ローカルに徹せよ」が根底にあるものと考えられる。

ここで考えておかなければならないことは、「方言ニュース」に使われる方言についてである。先に述べたように「方言ニュース」が復活した理由として、方言が沖縄のアイデンティティの象徴になったことが挙げられる。だとすると、どのような方言を使用するのか、ということが問題になるはずである。沖縄は方言差が非常に大きい。その中で、琉球王府のあった首里の方言が格調の高い方言とされる一方、庶民の言葉としては那覇の方言がよく知られている。それでは、「方言ニュース」で使用される方言とは、どのようなものなのだろうか。

### 3. 「方言ニュース」で使用される方言

#### 3.1 現キャスターの「方言ニュース」に対する取り組み

現キャスターである伊狩典子さんと小那覇全人さん、および現在伊狩さんの「方言ニュース」の方言訳に携わっている西岡敏さん（沖縄国際大学）に、インタビューを行った。

まず、キャスターのお二人が三代目キャスターになった経緯について伺った。前任者である仲井間元楷さんをご病気になったために、ラジオ沖縄は後任のキャスターを探していた。伊狩さんはラジオ沖縄の番組審議員だったため、小那覇さんはかつてラジオ沖縄に勤めていたため、後任に抜擢されたとのことである。

また、お二人が「方言ニュース」を方言に訳す準備段階についても伺った。伊狩さんの方は、1982年から2000年くらいまでは、収録が行われる前の週の金曜日に火曜、木曜の分の原稿を受け取って、じっくり時間をかけながら方言に訳していくという作業を行っていた。現在は、この方言訳の準備段階に言語学者の西岡敏さんが関わっている。西岡さんは伊狩さんをインフォーマントとして、首里方言を研究してきた方であり、2000年くらいから「方言ニュース」の下訳をし始めたとのことである。ラジオ沖縄は、まず放送前週の金曜日に西岡さんに原稿をファックスで送る。それを西岡さんが研究者の視点で首里方言に訳す（琉歌や組踊の表現を参考にしているそうである）。そして西岡さんの訳した原稿を、伊狩さんが原則、翌日の土曜日（場合によっては日曜日）に受け取り、自分が話し言葉として使っている言葉に訳す、という準備段階を経て、伊狩さんの「方言ニュース」用の原稿が完成するのである。

一方、小那覇さんの方は、「方言ニュース」収録当日（月曜日、水曜日、金曜日）の放送30分前くらいにスタジオに入り、その場で原稿を受け取って方言に訳していく。あまり日常で使われない単語が現れると『沖縄語辞典』（国立国語研究所編）を引いて確認する程度で、基本的に自分の使用する方言に基づいて訳していく。

このようにお二人は全く異なる手法で「方言ニュース」の原稿を受け取り、訳していくのである。伊狩さんはより正確な首里方言への翻訳を心がけているのに対し、小那覇さんは自分が使ってきた方言を普通に話すように訳していく。この二人の違いは今回同じニュース記事を読んでいただいた際にも現れた。

### 3.2 同じニュース記事の方言訳の比較（資料 参照）

今回の調査ではインタビュー後、下記の原稿を渡し、実際にその場で訳していただいた。なおこの原文は『読売新聞』の記事（2007年9月1日）による（文末を丁寧体に変えてある）。

この原稿を選んだ理由は、漢語（「共催」など）や外来語（「セレモニー」「キャラクター」）が含まれていることと、敬意の対象となるような人物（西村哲男副知事、天皇皇后両陛下）が登場していることによる。

#### 〔記事原文〕

「第59回全国植樹祭」（国土緑化推進機構と県が共催）が来年6月15日に北秋田市の県立北欧の杜公園で開かれることが決まり、県庁前で29日、開催を記念するセレモニーが行われました。秋田市のわかば幼稚園の園児たちが西村哲男副知事らにミズナラやイタヤカエデの苗木を贈呈されました。植樹祭のキャラクター「森っち」の着ぐるみが登場し、同市立川尻小学校吹奏学部の演奏も行われました。西村副知事は、「豊かな水と緑を次世代に引き継ぐため、県民と協力して森を育てていきたい」と語っています。植樹祭では天皇皇后両陛下がブナや秋田杉の苗木のお手植えなどを行うことが予定されています。

元の記事は「秋田市のわかば幼稚園の園児たちが西村哲男副知事らにミズナラやイタヤカエデの苗木を贈呈。」となっており、「贈呈しました」とするべきであったが、誤訳してしまった。調査では、上記のものを「原文」として提示した。

#### （1）「漢語」の言い換え

塩田（1999）は、「方言ニュース」で使用される言葉について、以下のような指摘をしている。

方言には生活用語以外の語彙が不足しているので、ニュース言語として適さない」と言われることがあるが、このような（「漁獲高」は「イユヌ アギダカ（＝魚の揚げ高）」など）言い換えを盛んにすることによって、ニュースの内容を損なうことなく方言によって情報が伝えられている。（塩田（1999））

今回の方言訳でも、以下のように漢語からの言い換えが行われていた。

〔伊狩訳〕ウマジュン スル（共催）／ハジマイル（開催）／クーングーヌチャー（園児）／ウサギタン（贈呈）／ツンジティッチ（登場）／クヌアトゥヌ ヌ

ー（次世代）/チム ワゴー（協力）

〔小那覇訳〕ムユースル（開催）/ワラピンチャー（園児）/ウクヤビタン（贈呈）  
/ツンジティッチ（登場）/アトゥアトゥヌ ンチュヌ チャー（次世代）/チ  
ム ッウチャーチ（協力）

## （２）指示語と接続語の多用

お二人の訳の特徴としてあげられることは、小那覇訳には、記事の原文にはない「クリ（＝これ）」「クヌ（＝この）」といった指示語（資料 の下線部分）が入ることである。これは、語調を整えるために挿入されるもので、沖縄の方言では、よく見られるもののようである（日本放送協会編『全国方言資料 第10巻 琉球編』所収の那覇市首里の会話にもこうした指示語が使用例が見られる）。小那覇さんの方言訳には、普段の話し言葉に現れる要素が入っているものと考えられる。

また、伊狩訳には、「アンシ（＝そして・それから）」という接続語（資料 の下線部分）が多く見られる。原文には該当する言葉がない部分にも用いられていることから、これも語調を整えるために多用されていると見ることができる。

このことについて、西岡さんに伺ったところ、語調を整える働きに加えて、小那覇さんの方は、前に出てきた言葉を正確に受けるため（例えば、前に「植樹祭」という言葉が出たので、それと同一である後の文に出てきた「植樹祭」という言葉の前に「この」を付けるなど）ではないか、また伊狩さんは分かりやすくするために長い文を避ける傾向があり、短い文を「アンシ」でつないで表現するのではないかと、ということであった。

## （３）敬語の現れ方

次に、敬語の現れ方について見ていく。小那覇訳にも見られるが、伊狩訳に敬語が多用されている。これは首里方言の特徴だと考えられる（西岡・仲原 2000）。例えば「国土緑化推進機構と県が共催」の部分で、伊狩訳では「コクドリヨッカスイシンキコートウ ケンヌ ウマジュン スル ワジャ（国土緑化推進機構と県がご一緒する仕事）」というように訳している。

この他に、伊狩訳と小那覇訳のいずれかに敬語（尊敬語）が現れている箇所を挙げる。

(1) 秋田市のわかば幼稚園の園児たちが西村哲男副知事らにミズナラやイタヤカエデの苗木を贈呈されました。

〔伊狩訳〕ニシムラテツオフクチジサヌンカイ（西村哲男副知事さんに）

〔小那覇訳〕ニシムラテツオフクチジサンターンカイ（西村副知事さんたちに）

(2) 西村副知事は、「豊かな水と緑を次世代に引き継ぐため、県民と協力して森を育てていきたい」と語っています。

〔伊狩訳〕ニシムラフクチジサノー（西村副知事さんは）

〔小那覇訳〕ニシムラフクチジェー（西村副知事は）

- (3) 西村副知事は、「豊かな水と緑を次世代に引き継ぐため、県民と協力して森を育てていきたい」と語っています。

〔伊狩訳〕ウファナシ ソーミシェーピータン（お話をさいました）

〔小那覇訳〕ハナシ ソーイピーン（話しています）

- (4) 植樹祭では天皇皇后両陛下がブナや秋田杉の苗木のお手植えなどを行うことが予定されています。

〔伊狩訳〕オテウエ シミシェール（お手植えなさる）

〔小那覇訳〕ウィール（植える）

まず、敬称の使用についてであるが、(1)では伊狩訳・小那覇訳とも西村哲男副知事に「さん」を付けて訳している。それに対して、(2)では伊狩訳だけが「さん」を付けて丁寧な言い方をしている。一方、述語の尊敬語表現を多用するのは、伊狩訳である。(3)(4)を見ると、小那覇訳は尊敬語を使用していないが、伊狩訳は尊敬語を用いている。

#### (4) 「ニュース文体」を意識した表現の現れ方

また、伊狩訳には、文末に「クトゥ ヤイピーン（ことです）」という表現が多く使用されている（資料 の太字部分）。これは、ニュースの場面で使われる語句だと考えられる。標準語のニュースにも度々聞かれる言葉であると思う。そして、その言葉を入れることで意識的にニュースの文体にしようとしているのだと思われる。一方、小那覇訳では、終わりの部分に締めくくりとして、「クトゥンカイ ナトーイピーン（ことになっています）」という表現を使っている（資料 の太字部分）。伊狩さんに比べると使用頻度は低いですが、ニュース的意味合いを含めているものだと考えられる。

#### (5) 発音に見る方言的要素と標準語的要素の現れ方

ここでは、発音における方言的要素と標準語的要素の現れ方を見ていく。標準語の母音 a i u e o は、沖縄方言では a i u i u となる。例えば標準語の「ため（為）」は沖縄方言では「タミ」となり、標準語の助詞の「の」は沖縄方言では「ヌ」となる。以下に、こうした e→i、o→u の変化が見られる語を挙げていく。

〔伊狩訳〕トゥ（助詞：と）ヌ（助詞：の）ウ（接頭語：御）ムユーサツタンディヌ（動詞：催される）クトゥ（名詞：こと）ウクナーリ（動詞：行われ）タミ（名詞：為）ミドゥリ（名詞：緑）

〔小那覇訳〕ヌ（助詞：ぬ）ヒラカリーン（動詞：開かれる）クトゥ（名詞：こと）ディ（助詞：で）クリ（代名詞：これ）ムユースル（動詞：催す）クヌ（代名詞：この）ウクナワリ（動詞：行われ）ミドゥリ（名詞：緑）タミ（名詞：為）



一方、今回の方言訳の中には、標準語的な発音も混在していた。「第 59 回全国植樹祭 (ダイゴジューキューカイゼンコクシヨクジュサイ)」「国土緑化推進機構 (コクドリヨッカスイシンキョー)」「県立北欧の杜公園 (ケンリツホクオーヌモリコーエン)」「西村哲男副知事 (ニシムラテツオフクチジ)」などの固有名詞では、伊狩訳・小那覇訳ともに、助詞「の」を「ヌ」に変化させているのを除いて、e→i、o→u の変化が起きていない。

また、沖縄方言では、ai・ae が融合して ee に、au・ao が融合して oo に変化する。今回読んでいただいた原稿の中には後者は含まれていなかったが、前者はいくつか含まれていた。そのうち、変化が起こった単語と起こらなかった単語を以下にあげる。(「来年 (rainen)」が「ヤーン」に置き換えられるなど、翻訳にあたって沖縄方言の別の単語に置き換えられたものは対象としない。)

変化が起こったもの

前 (mae)    メー (mee)    苗木 (naegi)    ネーギ (neegi)

変化が起こらなかったもの

第 (dai) 59 回 (kai) 全国植樹祭 (sai)    カエデ (kaede)

やはり、日常会話でよく使用されると思われる単語では変化が起こっているが、固有名詞やあまり日常会話では使わない単語では変化が見られなかった。

このほかに、沖縄方言の発音の特徴として、gi→ji、ki→chi、ri→i の変化が挙げられるが、今回のお二人の方言訳には、その変化が見られない単語があった。そのうち、「苗木 (naegi) が「ネーギ (neegi)」となり、[ネージ (neeji)] となっていない理由については、西岡さんによると、上代仮名遣いにおいて甲類の音(「木」「起きる」のキなど)については、この変化が起こらないそうである。また昔から受け継がれてきた言葉と、新しく移入された言葉の違いを示すメルクマールとなるのではないかとのことだった。

#### 4. おわりに

ここで、2.3 で述べた「方言ニュース」放送開始当初の編成部長である設楽さんが『沖縄タイムス』(1961 年 1 月 11 日)に寄せた反論に書かれてあった文を載せたい。それは「言葉は死ぬといっても生きるときもあり、生き続けよといっても死んでしまうこともある有機体であると信ずる。」という文である。この言葉が今回、調査してきた内容の根底にあると強く感じた。

沖縄方言は「方言ニュース」が放送されてきたおよそ 40 年で大きく変容を遂げた。ここでは、単語や文法が変わったというのではなく沖縄の人々の方言への意識が変わって使用される感覚が変わってきたということである。これは悪いとか良いとか、そのような問題ではなく、時代が変わるにつれて変容せざるをえなかったということ

表している。今回、「方言ニュース」に携わる人に実際に直接インタビューすることで、これらのことを「方言ニュース」の視点から考えることができた。

小那覇さんと伊狩さんは方言を幼い頃から使ってきた世代である。今後、そのお二人が現役を退き若い世代に引き継ぐ時期が来たとき、「方言ニュース」は今のよう形で存続し得るのだろうか。この点を、「方言ニュース」に研究者の立場で関わっていらっしゃる西岡さんに伺った。

西岡さんの見解では、後継者はラジオのDJや沖縄芝居に携わっている方が、後継者と成り得るのではないかとのことであった。沖縄には、「方言ニュース」以外にも方言で放送されているラジオ番組がいくつかある（報道番組ではない）。また、伝統芸能である沖縄芝居も伝統的な沖縄方言で演じられている。これらに携わる方を後継者候補としつつ、最終的には、ラジオ沖縄の意向によって決まるのではないかとのことであった。

沖縄の人々の「方言を後世に伝えていこう」という思い次第で、「方言ニュース」が今後も存続し得るかどうかが決まる、ということだろう。

#### 謝辞

伊狩典子さん、小那覇全人さん、ラジオ沖縄の森田明さん、西岡敏先生にはインタビューにご協力いただき、ありがとうございました。また小那覇全人さん、伊狩典子さんの方言訳の聞き取りと文字化では、西岡敏先生、仲原穰先生（沖縄県立芸術大学）にご指導をいただきました。記して感謝申し上げます。

#### 参考文献

- 内間直仁・野原三義編著（2006）『沖縄語辞典 那覇方言を中心に』研究社  
大城一男（1978）『沖縄人物一万人 人物情報』オキナワ・アド・タイムス  
小那覇全人（2004）「方言ニュースについて」『ことばと社会』8号 三元社  
かりまたしげひさ（1994）「方言ニュースのテキスト作成について」沖縄言語研究センター編『那覇市方言記録保存報告書 那覇の方言』那覇市教育委員会  
国立国語研究所編（1963）『沖縄語辞典』大蔵省印刷局  
塩田雄大（1999）「放送と方言」真田信治編『展望 現代の方言』白帝社  
辻村明・太田昌秀（1966）『沖縄の言論 新聞と放送』南方同胞援護会  
仲井真元楷（1983）「ある日の琉球語ニュース」『言語』12-4 大修館書店  
西岡敏・仲原穰（2000）『沖縄語の入門 たのしいウチナーグチ』白水社  
日外アソシエーツ編（1994）『沖縄人物・人材情報リスト』  
日本放送協会編（1972）『全国方言資料 第10巻 琉球編』日本放送出版協会  
飛田良文編・主幹（2007）『日本語学研究事典』明治書院  
ラジオ沖縄（1995）『「ローカルに徹せよ」ラジオ沖縄 35年のあゆみ』  
『沖縄タイムス』1960年12月28日/1961年1月10日/1961年1月11日

#### 参考ウェブサイト

- ラジオ沖縄 <http://www.rokinawa.co.jp/>  
おきなわBBTV <http://www.okinawabbtv.com/index.html>

資料 『沖縄タイムス』1960年12月28日より

沖縄をみつめる(15) 沖縄の方言

本土でも各地に方言がある。しかしその多くは、発音のなまりとか、一つ一つの単語についての方言である。もっとも、鹿児島方言は、沖縄のように話全体が方言である。鹿児島方言は、外から入ってきたオン密をみつけるためにつくられたものであると聞いている。しかし鹿児島では、どこに行っても、誰と話しても、普通語で通じないということはない。ところが、沖縄では、田舎の老人とでは、話が通じないこともある。しかも、本島の人々でさえ、宮古、八重山の方言はもちろんのこと、本島内の他の地区の方言すらわからないことが多いようである。そのうえ、都市、地方をとわず、老若男女をとわず、家庭で普通語と方言とを日常併用しているようである。一般に、言葉や文字は、文化の発達に影響するものである。沖縄の子どもにとっては、普通語をおぼえるうえに、方言までもおぼえねばならないとしたら負担の過重である。当用漢字をきめたり、漢字の簡容化をはかったりして、子どもの負担の軽減をはかりながら、これでは、矛盾していると同時に、文化の発達を阻害することになる。さらには、沖縄の人々は、本土の人に対して劣等感をもっているといわれているが、もしそうだとしたら、その原因の一つは、言葉、すなわち方言にあるのではなからうか。田舎の子どもが、都会の学校に転校すると、優秀な子どもでも成績が悪くなることが多い。教科書がちがったり、その進度がことなることも、その原因であるが、なにか発言すると、言葉がへんなので笑われはしないかという劣等感も、その原因となるものである。

沖縄の方言には、万葉時代の言葉のなごりがあるといわれている。そこで、本土から来た学者、殊に言語学系の学者の中には、純朴な沖縄の人々をおだてて、沖縄の方言をいつまでも残しておくように主張するものもあるらしい。少数の学者の学問的興味から、または実験材料として、八十万の沖縄の人々をモルモットにされてはたまったものではない。その必要があるなら、早くテープにでもとっておけばよいのである。また、老人に喜ばれるとか、社会問題に興味をもたせるためにかいう理由で、本土では皆無とおもわれる方言ニュースを放送しているところがある。普通語を理解できない老人は、おそらく小学校もロクに出ていないであろう。その人々に、方言のニュースを聞かせても、おそらくその内容の理解は困難であろう。方言ニュース放送という目アタラシイ企画で、地方の聴取者を少しでもひきつけようとするマス・コミのコマシャリズム(商売ゲ)のあらわれとしかおもえないのである、時代の先端をいくマス・コミにしては、方言のニュース放送はまことに珍風景である。私は、沖縄の古典演劇や民謡をのぞいては、沖縄の文化の発達のために、方言を追放すべきであると思うのである。

(琉大招へい教授 嘉納孔)

資料 『沖縄タイムス』1961年1月10日・11日より

言葉は生きものである 方言ニュース小論 (上)

去年暮れの二十八日付沖縄タイムス学芸欄、「沖縄をみつめる」(一五)で琉球大学が招へいた神戸大学の嘉納教授は方言について述べられ、さらに方言は文化、教育の発達を阻害する、方言ニュースは方言の温存に役立つもので、このような放送はマス・コミの商魂以外の何ものでもなく、珍風景であるときめつけた。そのいい方には寛容さがなく、この番組を編成している当面の責任者としては、うなずき難い点が二、三あるので非礼をかえりみず、あえて反論を呈する次第である。

方言ニュースについて論ずるならば必然的に方言にふれなければならぬし、したがって共通語つまり標準語についてどう考えるかと述べることになるが、いまはスペースに余裕がないので、とりあえずいきなり結論になるということもお許し願いたい。

われわれは方言ニュースを特に方言を保護しようとして放送するといったようなだいそれた考えは毛頭ない。人口構成、地理的条件、その時間のセット・イン・ユーズ、の台頭の分布などから見て、真にこの方言ニュースを必要とする人々は、私見では、三十歳内外と推計される。われわれはこれら特に新聞の、ラジオのニュースに撥する条件を言語的にもたない人々にサービスしている

だけで、言語政策とは何の関係もない。しかもいまラジオのチャンネルは二つあるから、方言ニュースをききたくない人は他のチャンネルをきく自由をもっている。ダイヤルを選択する自由が残っている以上、方言ニュースが方言を強制していることにはならないではないか。この言語の上の少数民族も僅かの時間でも、ラジオニュースに触れる権利をもっているのである。

そしてわれわれは方言ニュースを、永遠に続ける意志はない。きく人は次第に少なくなり、それはいつかは失われるべき番組である。しかもその時限はせいぜい五年を出ないと考える。そのような短い期間の番組と、なぜ言語の「変換」に近い転移という大問題とが、しいて関連づけられて性急に論じられるのか了解に苦しむ次第で、かえり見て他をいつているのではないかと疑いたくさえなる。すでに琉球方言が日本共通語へ転移するための大きな樋は完成されている。一日五分の方言ニュースがこれを阻害するには、その樋は比較にならないほど大きな力であることはだれの眼にも明らかではないか。(つづく)

#### 言葉は生きものである 方言ニュース小論 (下)

本土にもない珍しいと指摘されたが、私がかつて民放連報道専門部会の常任委員であった当時、免許条件においてNHKとちがうローカル文化の形成の任務を負わされている民放局として、方言によるニュースや天気予報は、一つの課題として真剣に討議されたことがある。よし本土になくとも、中国の北京言語に対する上海、広東の地域語放送、比島の公用タガログに対するピサヤ語放送など身近な例は多くある。これらの例はその言語の近親性から見て、日本共通語と琉球方言の間によく似ていると思う。また英国において、スコットランド訛、アイルランド訛がそんなに性急に、不寛容に、また不用意に否定的に語られることはないのである。

言葉についてかくあるべきであるとかあってはならないとかいうことをきくとき、私はそこにファシズムの匂いを感じる。古来、言語政策が性急にとりあげられるのは、必ず権力者の、為政者の御都合主義である。かつては島津藩の都合で「やまと」言葉から隔離され、明治維新後は富国強兵、協力統一の都合で標準語強制がはじまる。言葉がそのように扱われてもいいものであろうか。歴史において盛況な言語政策が成功した例はない。言葉は生きている人間の力で転移変化させるためにはたいへん時日がかかるものである。急いではない。

母語とちがった言葉も十分語れるにこしたことはない。しかし語れないことに劣等感をもつべきではなく、劣等感をもつような後進的感覚をもつ自分にこそコンプレックスをもつべきであろう。というのは私にとっては、日本語共通語、あるいは外国語がなめらかに語れるからといって、その人の全人格を認める気にはならないし、琉球方言でしか意志を通ずることのできないヤンバルの小父さんをないがしろに見る気にはならないからである。世に出て学問をし、文化を担い、高位にのぼろうとする人にとっては方言ニュースは無用の長物であり、その人は大いに共通語を、また外国語を学べばいい。しかし方言ニュースでしか、外界に接触することのできない人にはそれは必需のコミュニケーションである。電波は各個人が権利をもつ文明の利器である。方言しか理解できない人からその権利をうばっていいものであろうか。僅か五分にめくじらを立てることはないと思う。

終わりに嘉納教授にとくにうかがいたいのは教授は沖縄の古典演劇や民謡は残していいが、方言は追放すべきだといわれるが、方言が失われたとき、特に詩劇である琉球演劇、パラッドあるいは相聞歌である古民謡が、どのようにして生き残りうるかということで、これについての教授の想像される構図である。方言が失われたとき、これらのものもまた失われると考えられるが、といってそのために方言を残せなどというつもりはない。私は愛情の念をもつがそれもまたやむを得ないと思うものである。方言は死ぬ、古典や古謡は残れという風にきこえてそれでは虫がよすぎると思えるのである。

言葉は死ぬといっても生きるときもあり、生き続けよといっても死んでしまうこともある有機体であると信ずる。

設楽敏雄(ラジオ沖縄編成本部長)

伊狩さんに読み上げていただいた方言訳の音声を文字化し、さらに、伊狩さんご本人によって、「方言ニュース」で使用することばに訂正したもの。伊狩さんから訂正の指摘のあった箇所、および言い間違い・言い淀みの箇所については、末尾にまとめて記載する。

ダイゴジューキューカイ ゼンコクシヨクジュサイ コクドリヨッカスイシンキコ  
 ートウ ケンヌ ウマジュン 1 スル<sup>1</sup> ワジャ<sup>2</sup> ヤイビーシーガ ヤーン<sup>3</sup>ヌ  
 ルクグウチヌ ジューグニチニ キタアキタシヌ ケンリツホクオーヌモリコーエン  
 ウウティ<sup>4</sup> ムユーサツタンディヌ<sup>5</sup> クトウ ヤイビーン。 アンシ<sup>6</sup> ケンチョー  
 ヌ メーウウティ ニジュークニチ ハジマイル キネンスル セレモニーヌ ウク  
 ナーリヤビタン。 アンシ アキタシヌ ワカバヨーチエンヌ クーングラーヌチャ  
 ー<sup>7</sup>ガ ニシムラテツオフクチジサヌンカイ<sup>8</sup> ミズナラヤ イタヤカエデヌ ネーギ  
<sup>9</sup> ウサギタン<sup>10</sup> ディヌ クトウ ヤイビーン。 ショクジュサイヌ キャラクター  
 「モリッチ」ヌ 2 ッンジティッチ<sup>11</sup> ドーシリツカワジリショーガッコースイソ  
 ーガクブヌ エンソーン ウクナーツタンデヌ クトウ ヤイビーン。 アンシ ニ  
 シムラフクチジサノ<sup>12</sup> 「ナー ユタカナ ミジトウ ミドゥリ クヌアトウヌユ  
 ー<sup>13</sup>ンカイ フィチワタチ イチュル<sup>14</sup> タミニ ケンミン ウマンチュ<sup>15</sup> トウ 4  
 チム ワゴ<sup>16</sup>ー トウティ<sup>16</sup> ムイ<sup>17</sup> スダティティ イチャビラナ」 ンディイチ  
 ウファナシ ソーミシェーピータン。 アンシ ショクジュサエー<sup>18</sup> ウティ テンノ  
 ー コーゴ<sup>19</sup>ー リョーヘイカヌ ブナ ウリカラ<sup>19</sup> アキタスギヌ ネーギヌ オテ  
 ウエ シミシェール クトゥンカイ ナットンディヌ クトウ ヤイビーン。

- 1 ウマジュン スル:「ウ」は敬語の接頭辞「お・ご(御)。「マジュン」は「一緒(に)」「とも(に)」の意味。
- 2 ワジャ(名詞): 仕事。職業。
- 3 ヤーン(名詞): 来年。
- 4 ウウティ(助詞): ~で。~において。場所を表す助詞。
- 5 ムユーサツタンディヌ:「ムユーシユン」(催す。催し物をする)の受身形「ムユーサリーン」(催される)の連体形。
- 6 アンシ(接続詞): そうして。そして。それから。
- 7 クーングラーヌチャー: 小さい子どもたち。「クー」は「小さい」意味の接頭語。「グラー」は「子(ツクワ)。「チャー」は複数の人を表す接尾辞。
- 8 ~サヌンカイ: ~さんに。「ン」のあとに助詞「ンカイ」が続くときは「ヌンカイ」に変化する。
- 9 ネーギ(名詞): 苗木。
- 10 ウサギタン(動詞): 差し上げた。「ウサギユン」(差し上げる)の過去形。原文では「子どもたちが副知事から贈呈される」ことになっているが、ここでは、「子どもたちが副知事に差し上げる」という訳になっている。
- 11 ッンジティッチ: 出て来て。「ッンジユン」(出る)のテ形「ッンジティ」(出て)に「チューン」のテ形「ッチ」(来て)が後接した形。
- 12 ~サノ: ~さんは。「ン」のあとに助詞「ヤ」が続くときは「ノー」に変化する。
- 13 ユー(名詞): 世。代。
- 14 フィチワタチ: 引き渡して。「フィチワタシユン」(引き渡す)のテ形。
- 15 ウマンチュ(名詞): 人民。一般の庶民。多くの人。万人。「御真人」から。
- 16 チム ワゴ<sup>16</sup>ー トウティ: 心を合わせて。「チム」は「心」「心情」「情」。「ワゴ<sup>16</sup>ー」は「和合」で仲良くすること。むつまじくすること。「トウティ」は「取って」。
- 17 ムイ(名詞): もり(森)。丘、山、土が盛り上がり高くなっているところ。
- 18 ショクジュサエー: イ+助詞ヤはエーになる。
- 19 ウリカラ(接続詞): それから。それ以後。

小那覇さんに読み上げていただいた方言訳の音声を文字化し、さらに、小那覇さんご本人によって、「方言ニュース」で使用することばに訂正したもの。小那覇さんから訂正の指摘のあった箇所、および言い間違い・言い淀みの箇所については、末尾にまとめて記載する。

エー ダイゴジューキューカイ ゼンコクシヨクジュサイエー コクドリヨッカスイシン 1 キコー トゥ ケンガ キョーサイ ヤティ 2 クヌ シヨクジュサイヌ<sup>1</sup> ヤーン<sup>2</sup>ヌ ルクグウチジューグニチニ キタアキタシヌ ケンリツホクオーヌモリコーエンジ ヒラカリーンディル<sup>3</sup> クトゥヌ キマティ ケンチョーヌメー<sup>4</sup>ンジ ニジュークニチ クリ ムユースル<sup>5</sup>クトゥ キネンスル セレモニーヌ アイピータン。エー アキタシヌ ワカバヨーチエンヌ 3 ワラビンチャー<sup>6</sup>ガ ニシムラテツオフクチジサンターンカイ<sup>7</sup> 4 ミズナラトゥカ 5 イタヤカエデヌ ネーギ<sup>8</sup> ウクヤビタン<sup>9</sup>。エー クヌ シヨクジュサイヌ クヌ キャラクター「モリッチ」ヌ 5 キグルミン ッンジティッチ<sup>10</sup> 6 ドーシリツカワジリ<sup>11</sup> ショーガッコーヌ スイソーガクブヌ エンソーン ウクナワリヤビタン。

エー ニシムラフクチジェー<sup>12</sup> 「イPPER ユチュク<sup>13</sup> アル ミジトゥ ミドゥリ ンー アトゥアトゥヌ ッチュヌ チャー<sup>14</sup> ンカイ ヒキチガスルタミニ ケンミントゥ チム ウチャーチ<sup>15</sup> クヌ ムイ<sup>16</sup> スダティティ イカントーナイビラン」チ ハナシ ソーイピーン。エー シヨクジュサインカイヤ テンノー コーゴー 7 リョーヘーカン クヌ ブナトゥカ アキタスギヌ ネーギ 8 ドウナークルッシ<sup>17</sup> ウィール クトゥンカイ ナトーイピーン<sup>18</sup>。

- 1 ヌ(助詞):「の」にあたる助詞。
- 2 ヤーン(名詞): 来年。
- 3 ヒラカリーンディルは「開かれるという」という意味である。
- 4 メー(名詞): 前。前方。
- 5 ムユースル(動詞): 催す。催し物をする。
- 6 ワラビンチャー(名詞): 子供たち。
- 7 ンカイ(助詞):「に」にあたる助詞
- 8 ネーギ(名詞): 苗木。
- 9 ウクラリヤビタン: 贈られました。ウクユン(贈る)の受身形ウクラリユンの丁寧形ウクラリヤビタン(贈られます)の過去形。
- 10 ッンジティッチ: 出て来て。「ッンジユン」(出る)のテ形「ッンジティ」(出て)に「チューン」のテ形「ッチ」(来て)が後接した形。
- 11 ジ(イ語形)+ヤ(は)で「ジェー」に変化する。
- 12 ユチュク(ユチク)(名詞): 豊か、富裕。
- 13 アトゥアトゥヌ ッチュヌ チャー(名詞): 後々の人たち。将来の人たち。
- 14 チム ウチャーチ: 心を合わせて。「チム」は「心」「心情」「情」。「ウチャーチ」は「ウチャーシュン」(打ち合わせする、協議する、協力する)のテ形。
- 15 ムイ(名詞): もり(森)。丘、山、土が盛り上がり高くなっているところ。
- 16 ドウナークルッシ(副詞): 自分たちで。自分自身で。
- 17 クトゥンカイ ナトーイピーン: ことになっています。なお、小那覇さんが通常使用しているニュースの終わりの言葉は、「ウンヌキヤビタン(申し上げました)」である(かりまた(1994))。

[ 話者による訂正箇所 ]

話者による訂正箇所を以下に挙げる。方言キャスターであっても、日常生活において、常に方言を使用しているわけではない。この対比によって、方言に切り換えやすい表現と切り換えにくい表現の違いなど、現在の沖縄の方言使用の実態を見ることが出来ると考えられる。

< 伊狩さんによる訂正箇所 >

・訂正前 訂正後

ムユーサリール クトゥヌ キマタンディヌ ムユーサツタンディヌ  
カイサイ ハジマイル  
ウクナーリタンデヌ ウクナーツタンデヌ  
ツギヌ クヌアトゥヌ  
シヨクジュサイエー テンノー シヨクジュサイエー ウティ テンノー  
ヨティ サットーディヌ クトゥンカイ ナットーディヌ

・以下の箇所に言いよどみ、独話もしくは言い換えが生じた。

- 1 ッシ(「ウマジュン ッシ」(ご一緒し)と言いかけて、「ウマジュン スル」(ご一緒する)と言い直した。)
- 2 チチョール トージョー アー (着ぐるみを訳そうとしてチチョール(着ている)と言いかけて止めた。)
- 3 ドーシタチカワ(私の説明が不十分だったために「市立川尻」のところが「シ、タチカワ...」と混乱が生じた。)
- 4 チ

< 小那覇さんによる訂正箇所 >

・訂正前 訂正後

キョーサイ キョーサイ ヤティ

・以下の箇所に言いよどみ、独話もしくは言い換えが生じた。

- 1 キコーカ
- 2 モー コレワ ソノママデ(そのままの文であるということを確認。)
- 3 シー(「生徒」の「生」だと思われる。「幼稚園の生徒」と言いかけて、「幼稚園の子ども達」に言い換えた。)
- 4 ミズ
- 5 イタ
- 6 ナークヌ(「なんだ、この...」。次の「着ぐるみ」を訳そうとして発された言葉。)
- 7 エー タチカワ ナンダコレ(私の説明が不十分だったために「市立川尻」のところが「シ、タチカワ...」と混乱が生じた。)
- 8 タイ(二人。両人。)ヌ
- 9 ナークヌ